



歎討疾根斬

四

^ 13
3325
4



門へ13
3325
4

鬼子母神一冊

作世たる身よりいへん深元子・青年分所州日光守初
行木下年山居居後徳心並修く浪流石山世法津凡



十

教討衰根喇卷之四



目録

一 姉川七郎左衛門 脚一節を退けしと
討ら事

一 返田脚之進 分産補(曲者忍入)事
脚一節 寛化方事



大正十年八月廿九日寄
本大學出版部

欽討炭根刺卷之四

姉川七郎左馬助一郎を退す乙討年

友も姉川七郎左馬助一郎と年小
お物極動を赤きりひひふふ多
い少極よまゆりまどたしし少
て唐言一ことよ父七郎左馬助
右替少く加替しりりよその甲

ちくおくらねをとり日比の廣言は似
合ざり仁言なりとち争も口傍り少
うらび其身も法士の心氣も面目を
く病氣と号し引籠り店々々々
七高左衛門も今おの一件いづれも
よおのくどもちうくよ及ぶに
七が引籠り店々々々を見たりよつり
よおのくどもちうくよ及ぶに
要言稽記

何卒脚一節よあまをとりせちりの
例をとりぞけしりのとい事のと
史をとり一節よあまをとりせちりの
めてもまをけ入魂の中は左近山田
店々々々わち七九節よあまをとりせちりの
左衛門の言く何事なりとれは婦川ちひ
怪ひく何事なりとれは婦川ちひ
通一酒をとりあまをとりせちりの

有らば あまがさ 山田氏の ことば 山田氏 おろ 山田氏の おろ 山田氏の おろ
 先達 あつ 先達 あつ 先達 あつ 先達 あつ
 行又 あつ 行又 あつ 行又 あつ 行又 あつ
 多 あつ 多 あつ 多 あつ 多 あつ
 一 あつ 一 あつ 一 あつ 一 あつ
 多 あつ 多 あつ 多 あつ 多 あつ
 一 あつ 一 あつ 一 あつ 一 あつ
 多 あつ 多 あつ 多 あつ 多 あつ
 一 あつ 一 あつ 一 あつ 一 あつ
 多 あつ 多 あつ 多 あつ 多 あつ
 一 あつ 一 あつ 一 あつ 一 あつ

今 あつ 今 あつ 今 あつ 今 あつ
 の あつ の あつ の あつ の あつ
 具 あつ 具 あつ 具 あつ 具 あつ
 小 あつ 小 あつ 小 あつ 小 あつ
 也 あつ 也 あつ 也 あつ 也 あつ
 小 あつ 小 あつ 小 あつ 小 あつ
 也 あつ 也 あつ 也 あつ 也 あつ
 小 あつ 小 あつ 小 あつ 小 あつ
 也 あつ 也 あつ 也 あつ 也 あつ
 小 あつ 小 あつ 小 あつ 小 あつ
 也 あつ 也 あつ 也 あつ 也 あつ

おのゝき
名たなふしよあやしー^ヤ居りまは^ふ忍^ぶを
かち^ち魯^ろ行^{ぎょう}事^じり^り事^じよ^よる^るし^しい^いく^くり^りね
ち^ちり^りも^も 伊^いも^もも^もら^らづ^づー^ま内^{ない}外^{がい}い^いも^もも
脚^{あし}之^の節^{ぶね}が^が目^めご^ご筋^{すぢ}人^{ひと}も^もち^ちげ^げち^ちり^り推^{おし}是^こ
を^をい^いみ^みく^くく^くぞ^ぞし^しぢ^ぢら^らゆ^ゆく^く今^{いま}あ^あの^の情^{なさけ}
た^たも^も力^{ちから}を^を活^かく^くく^くふ^ふ物^{もの}り^りこ^こさ^させ
ぬ^ぬち^ち筋^{すぢ}尾^び連^{れん}ぬ^ぬも^もら^らと^とを^を筋^{すぢ}よ^よう^うの
勤^{しん}い^いぢ^ぢの^の知^ちら^らる^る御^ごめ^めく^くの^の事^{こと}

け^けい^い
の^の家^け事^じを^を初^{はつ}ま^まき^き管^{くだん}付^つ控^{かう}さ^さら^らー
将^{せう}を^を進^{しん}を^を朱^{しゆ}ら^らと^とき^き業^{わざ}あ^あり^りあ^あら^らよ
彼^かりの^の情^{なさけ}い^いゆ^ゆて^てい^いあ^あら^らる^るが^が物^{もの}つ^つ多^た
を^をも^も管^{くだん}さ^さら^らき^きし^し又^{また}脚^{あし}筋^{すぢ}も^もは^はと^とを^を管^{くだん}り
の^のう^うれ^れは^はお^お死^しま^まら^らす^すた^たも^も彼^か勤^{しん}よ
も^もあ^あを^をお^おと^とて^て弱^{じやく}ら^らづ^づー^まそ^その^の時^{とき}あ^あく
お^お今^{いま}を^を將^{せう}よ^よあ^あ物^{もの}さ^さや^やし^しの^のと^と合^あ則^{そく}
ー^まて^てま^まご^ごと^と見^みら^らき^き一^{いち}を^を信^{しん}ぢ^ぢら^らる^る見^みぬ

十^ち一^{いつ}の^の知^ち師^しの^の行^{ぎょう}の^の苦^くも^もあ^あく
 一^{いつ}の^の捕^{とら}し^しの^のを^をあ^あら^らす^すき^き性^{じやう}の^の
 およ^{およ}と^とら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 あ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 う^うま^まの^の性^{じやう}は^はさ^さと^とを^をあ^あら^らす^すべ^べ
 は^は名^な国^{こく}を^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 物^{もの}の^の師^しは^はあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 よ^よあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ

その^{その}日^ひを^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 甲^かの^の子^こを^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 乙^{おつ}の^の子^こを^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 丙^{おつ}の^の子^こを^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 丁^{おつ}の^の子^こを^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 戊^{おつ}の^の子^こを^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 己^{おつ}の^の子^こを^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 庚^{おつ}の^の子^こを^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 辛^{おつ}の^の子^こを^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 壬^{おつ}の^の子^こを^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ
 癸^{おつ}の^の子^こを^をあ^あら^らす^すべ^べに^にあ^あら^らす^すべ^べ

くく七節なまのむら一味のとのま
さるぐ後身をあらぐどーれども
甲斐あさく只初合てはそをくにとむら
くくくをくくく目数を導くく

後回脚之進ぐ屋脚曲者まのびの事

後脚一節を究にち急の事

後脚一節を連百を所の事や

くくく七節なまのむら一味のとのま
さるぐ後身をあらぐどーれども
甲斐あさく只初合てはそをくにとむら
くくくをくくく目数を導くく
後回脚之進ぐ屋脚曲者まのびの事
後脚一節を究にち急の事
後脚一節を連百を所の事や
くくく七節なまのむら一味のとのま
さるぐ後身をあらぐどーれども
甲斐あさく只初合てはそをくにとむら
くくくをくくく目数を導くく
後回脚之進ぐ屋脚曲者まのびの事
後脚一節を究にち急の事
後脚一節を連百を所の事や



よしののらちやうく^{よしの}とゆ^{よしの}—^{よしの}あつて
会^{あひ}ひ^ひま^まて^てあ^あ—^ああ^あを^をあ^あ—^あ酒^酒能^能
福^{ふく}よ^よあ^あり^りづ^づ—^あ四^四音^音の^のあ^あづ^づ—^あま
—^あワ^ワ々^々—^あ思^思ひ^ひの^の夜^夜も^も又^又々^々れ^れの^の早^早く
は^は唯^唯を^を—^あ脚^脚を^を進^進ま^まる^る情^情を^をま^ま
あ^あら^らの^の留^留り^り定^定め^めは^は脚^脚—^あ節^節は^は繁^繁
よ^よ随^随ひ^ひ家^家内^内も^も形^形々^々の^のう^うご^ごど^どれ^れあ^あて
あ^あく^く熱^熱眠^眠—^あう^うら^らぐ^ぐる^る留^留り^り家^家仕^仕作^作

の時^{とき}—^あう^うら^らぐ^ぐる^る留^留り^り家^家仕^仕作^作
と^と云^云着^着衣^衣を^をま^まる^る—^あ後^後に^に脚^脚を^をま^まる^る
会^あひ^ひま^まて^てあ^あ—^ああ^あを^をあ^あ—^あ酒^酒能^能
福^{ふく}よ^よあ^あり^りづ^づ—^あ四^四音^音の^のあ^あづ^づ—^あま
—^あワ^ワ々^々—^あ思^思ひ^ひの^の夜^夜も^も又^又々^々れ^れの^の早^早く
は^は唯^唯を^を—^あ脚^脚を^を進^進ま^まる^る情^情を^をま^ま
あ^あら^らの^の留^留り^り定^定め^めは^は脚^脚—^あ節^節は^は繁^繁
よ^よ随^随ひ^ひ家^家内^内も^も形^形々^々の^のう^うご^ごど^どれ^れあ^あて
あ^あく^く熱^熱眠^眠—^あう^うら^らぐ^ぐる^る留^留り^り家^家仕^仕作^作

ハまうは四三下任セらぐ一内申も
らぐ西声うけらまわらぐ一とき
次く退き休むら物もそきを一
一は公持くは是くは残星を
凌ぐし多めよ存るよ隆子を完手
月をなよ深も赤けらよ星き結
し多りの探りぬのねの物持
坪北月よありら多ら物一節の
こ

利多りののちねは外ちを志
まらありて何ひららよ又臨り
己事の始くめて二人までまのびのり
けらめく助し節の振長をなして屋
ありらら時被曲りのともの声をも
そひみりより物命子組付をな
多りと多んが首を物して
けのは室のまら口を物て

撒ちがりを右みぎのうへへおろし者ものをむのう
にちがりは庭にわ者ものよどあと倒たふさすを
中なにたりのまんをは縁のうへに投
つげらるこののの音よま者ものを庭林を
庭ありて縁の上のまんをはまりて押
行まりめてめと一は取一はと人
を引飛て内に影を見るまりと
人ともよ布のまりめて漬うる者

己おの林を一はまりめてをめのの
泉を一はまりめて白を物をまりめて
引まりめて一は取一はと人
を引飛て内に影を見るまりと
人ともよ布のまりめて漬うる者

て父ちちも子こも之これを上かみへくのの如ごとく
増まし給たまふを思おもひを余あまのい合あひを
物もの々々を家うち中ちゆうの中ちゆうにも偏へん施しさる者もの
ゆらし又今いま月つきのま曲まがりのこを極まめて
婦あんな川が七しち節ぶしたあがは仕し業ぎやうをうらしまるが
そのともなりて番々たふし小こ梅うめくわてん氏し
越こえのとし一いつ歩ふくしとき婦あんな川が
時とき依より節とと集あはれと御氣ごに給ふ給ふ
給たまふ

このねを たいとトと こと つかあらうその みのけの
そのを思はれの事は自らに心を使はつて
おもひをいはすに御ご城じやうくらの事と
たが 身みいはすに御ご城じやうくらの事と
左ひだりの方智ち恵えを用ひて山やま々々をさ
切きりに集あはれと思ひに給たまふに
あらうと思おもひに給たまふに
思おもひに給たまふに思おもひに給たまふに
ようらしまるの事は自らに心を使はつて

彼の者どもを教はるゝあはては教ふる
りのゆゑは定めて白物まくぢなるりの
とおりのあつまい上うへとよろる巧たくみ
をちきしもそのつゝつ又曲者まがものを
の教ふるはあとのあとはあのを
あつまいあきく教をなる年とし
を眼まなことよひきづくの曲まが事こと又
まゝと流ながる初はじの基もといともあ

らし是等の事をおのあつまいとく
ともしなす馬うまをつるるもむも
指さし帯おび口くちのなはな又また白しろ物ものとあつまい
教をはるる事こと傳つたへた身み和わ四年しねん十じ
月つき大おほ之の白しろ山やま名な伊い豆まめ子こ氏し細こ川がわ隆たか盛もり氏し
と安やす信のぶ北きた山やまとあつまいしちちりり子こ孫そん
利りをえ流ながるる教をふるる事こと年とし半はんくくああが
りり多おほくくそのとき御ご意いの橋はしをあら

て致え者存人さう多くちよあられ
し事うれば常るすうの心
そくざうしを正し情のちね
たれをたすワ羊をゆ多くあのみ
ちきは具匠をとそせれを正し
しと事多く正しとめやまうね
い故もこのあきけを感し
るしを正しとめを謝せし

とまのみのゆまゆまて其より
し後、四條純子の合親より
討死しとるとのやめよの例もあ
るのうれば心者の通るもめ
多りと信りたれば林多まに
そりしゆしとるひしとて
を感しとる

款討産根影卷之四

